

コートジボアールでの協力活動を終えて

松岡 満男

筆者は1993年7月から1995年までの2年4か月間、西アフリカのコートジボアール共和国(以下象牙海岸)のカチョラ県カチョラ市にあるアフリカ開発援助事務所(以下AID)というNGOに青年海外協力隊の養蜂隊員として派遣された。象牙海岸は北緯5度、西経5度に位置する。南はギニア湾に面し、ガーナ、リベリア、ギニア、マリ、ブルキナファソと国境を接する国である(図1)。面積は北海道の約4倍、人口はおよそ東京都とおなじで首都はヤムスクロである。しかし実質上の首都はアビジャンで人口は200万人を超える西アフリカきっての大都会である(図2)。1970年代から1980年代にかけて「象牙の奇跡(ミラクル・イボリアン)」というコーヒー・カカオを中心とした高度経済成長を遂げ「黒い日本」と呼ばれたが、コーヒー・カカオ市場の低迷とともに経済も衰退していった。

象牙海岸の気候は、熱帯雨林、熱帯サバンナに占められている。また1年は雨季と乾季に区別されている。

私の赴任地であったカチョラ市は、アビジャンから北へ400km(バス約6時間)のところ

で、熱帯サバンナに属している。6~9月の雨季、そして10月~3月の乾、その他が存在する。雨季といっても1日中雨が降る日はほとんどなく、激しい夕立のような一時的な雨が一日に一度降るぐらいである。日中の気温は高い。また、乾季の中でも特に11月~2月はハルマターンと呼ばれ一滴の雨も降らない日が続き、また強い季節風によってサハラ砂漠の砂が運ばれてきて宙に舞い、町中がぼんやりかすんでいてとても埃っぽくなる。太陽の光が砂により遮断されるので比較的涼しい。

I 象牙海岸における養蜂

養蜂の歴史は古く、現在でも伝統的な手法が存在する。伝統的方法によって採られたハチミツは“le miel brulé(焼かれたハチミツ)”と呼ばれている。養蜂家たちは日中に見つけた野生の蜂群を夜中に強襲する。火を使って蜂を追い払い、巣を全部切り取り採蜜する。色は黒く、かなり焦げ臭いハチミツでクセも強い。

近代養蜂についていえばまだまだ歴史は浅い。カチョラ市周辺においていえば、1980年代半ばより農業省の家畜部とドイツの援助によ

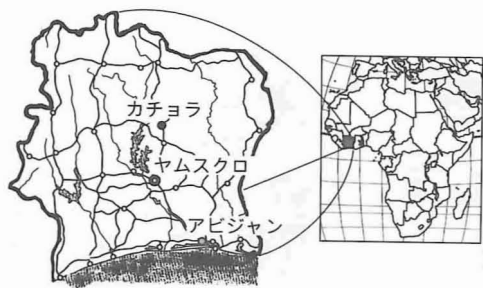


図1 コートジボアール共和国とカチョラ市の位置



図2 アビジャン中心部



図3 バオバブの木に営巣した野生群

って始まった。普及方法は、養蜂希望者を募り、養蜂道具一式を販売し、1~2日の簡単な研修の後に実際に蜂を飼育するという方法であった。

II 象牙海岸のミツバチの特徴

存在するミツバチはいわずとも知れたアフリカ蜂である(図3)。噂に聞いていた以上に凶暴で、内検をすれば、巣箱の蓋を開けた途端に彼女たち(ミツバチ)が飛び出し、面布にもびしりと蜂が張り付き、また大量の蜂の体当たりを自分の体で感じることができる(図4)。内検後も彼女たちは、体にまとわりつき、草むらでじっとしていてもいなくなるまでに30分くらいかかる。周辺住民たちも彼女たちにかんがりの恐怖感を抱いており、内検することにかんがり敏感であった(図5)。

最初の頃は私もロシア式面布を使用していたが、彼女たちの激しい攻撃に耐えられずに、面布と服が一体化したヨーロッパ式のものを使用した。あと彼女たちは、内検時には大部分が外に飛び出し巣箱の壁などに張りついている。

象牙海岸には2種類のアフリカ蜂が存在する。黒い体をしたabeille noire(アベイユ・ノワール)と普通のミツバチと同じ色をしたabeille jaune(アベイユ・ジョーン)である。

彼女たちの性質は、逃去しやすく、花が少なくなる乾季の始まりの時期などには些細な取り扱いミスで多くの群を逃がしてしまうことになる。また花蜜を集めると同様にプロポリスを集めることが大好きである。

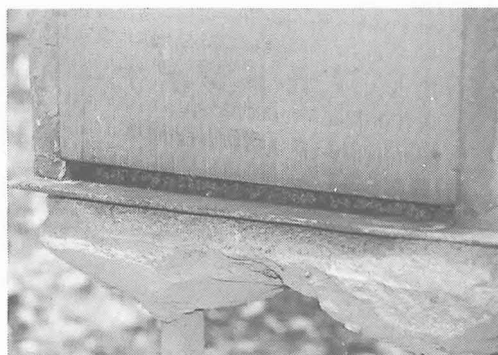


図4 巣門で警戒を強めるミツバチ

III 実際の活動(1年目)

私が配属先であるAIDから要請された事項は以下の通りであった。

- ・養蜂の普及と理解
- ・組織のグループ化
- ・青少年婦人を対象とした養蜂講習会の開講
- ・蜂の生産物を利用しての現金収入の確保
- ・近代的養蜂への転換

配属先は創設されたばかり、さらに私が初代の隊員ということで何から手をつけてよいのかわからなかった。しかし、とりあえず歩いていける範囲で一軒ずつ養蜂家の家庭を訪問して話を聞くことにした(図6)。すでに活動をやめているものもいたが、きっかけがあれば再開したいという者もいたので養蜂に対して興味がある者を募っての会合を企画した。その結果、養蜂講習会の開催が決定され、週に1~2回程度で無料で行うことにした。

フランス語での講習であるから準備だけでも大変で、友人たちに助けられながら何とか乗り



図5 内検中の筆者



図6 養蜂家とともに

切ることができた。基本的なことばかりであったが、養蜂に興味を持たせることが目的だったので楽しくやれたと思う。最初は受講者も30名程度いたが、熱意のない者は脱落していき、最終的には12名程度になった。

講習会を続けている間に実際に蜂場で活動するための必要最小限の服や道具を隊員支援経費を利用して準備した。現地の仕立屋や板金屋が見よう見まねで作ったものであったが形だけは整った。そして講習会を始めて3か月後にやっと蜂場に出て、実際に蜂に触れることができた。ちょうど近くの小学校で8群ほど飼っているところがあったので(図7)、学校が休みの土曜日の早朝に行くことにした。蜂に対する恐怖感を払拭させるために、わざと刺されて見せたり、たまに手袋なしで蜂場に出たりした。彼らにも蜂針の痛みを理解してもらうために刺されるようにアドバイスをしたりもした。しかし実際には彼ら以上に筆者が学んだことの方が多かったようだ(図8)。1年目にやれたことはこの



図7 講習会を行った小学校の蜂場

講習会と、あとは小学校の上級生を対象に行った自然と養蜂の5回シリーズの講習会(図9)、そして配属先の指導者の育成だけであった。何しろ単車の貸与が遅れ、どこにいくにも歩いてだったので必然的に活動範囲は狭められた。

IV 実際の活動(2年目)

国連開発計画(UNDP)の援助で巣箱を導入することになった。当初の計画では、15枚のトッパーを収納できる小型のケニア式巣箱を導入しようとしてモデルを作ったりもした。しかし発注する段階になり筆者がフレグモーンという細菌性の感染症を患い、扁桃腺の摘出手術なども行ったので2か月の休養を余儀なくされた。その間にも巣箱の話は着々と進んだ。しかし私の不在の間に注文されたのは日本式のラ式巣箱であった、私も予想外のことで驚いたが仕方なく、とりあえず導入することにした。

これまでは、巣箱の中の巣板間隔がバラバラで、かなり太い針金をそのまま使用していたところもあったので、トッパー自体の幅をアフリカ蜂用に3.2cmにした(図10)また巣をまっすぐに作らせるために下部は三角形にした。

病気療養中にバイクを貸与され、この巣箱を持って周辺4か所の村々での養蜂講習会を開始した。また前年度の講習会に参加した青年たちが中心となり現地語での講習会も開かれた。筆者がだらしないので周りの若者たちが自主的に動いてくれたことは大変にうれしい限りだった。



図8 蜂場での講習の後で

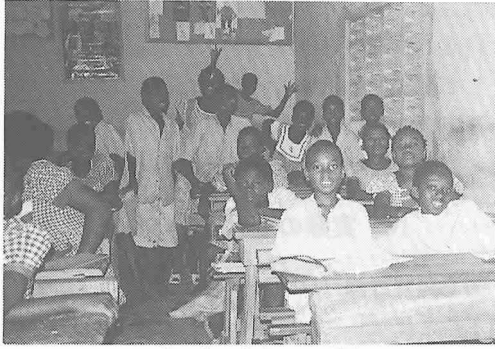


図9 講習会に参加した学生たち

V 採蜜

今までの採蜜は夜に懐中電灯を持って行うのが普通であった。これは夜の方がミツバチがおとなしいと信じられているからである。しかし視界が悪いので採蜜時間が長くなり、そのことが逆に彼女たちの機嫌を損ね、障害になっているようだったので、早朝採蜜を指導することにした。前もって内検することで蜜の有無を確認し、仕事をスムーズにすることを教えた。日の出前には蜂場でスタンバイし、明るくなると同時に採蜜を開始してできるだけ素早く終わらせるようにした。実際に絞るのは圧搾機を使って行った(図11)。また濾過器は日本製の3重みっしを用いて可能な限りに蜜の見映えを良くしようと試みた。この方法によって良質のハチミツを確保することができた。これらの蜜は *le miel clair* (透明のハチミツ) と呼ばれ販売の成果もまずまずであった。

VI 反省点

以上のように活動を簡単にであるが振り返ってみると、筆者の力のなさを思い知るばかりで

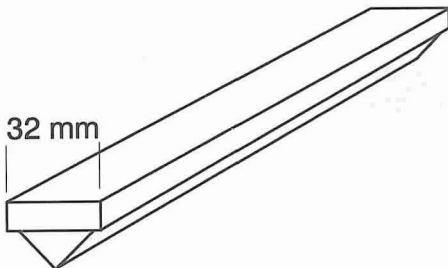


図10 トップバー



図11 圧搾器で蜜を搾り出す

ある。

一応、女王蜂の人工養成やローヤルゼリーの採取の仕方についても見せはしたものの実際に応用はできなかった。

また何とか少しだけでもいいからミツバチの性格を変えようとしたが力が及ばなかった。内検についてもやり過ぎのためにかえって蜂群の勢いをそぎ、蜂群を減らす結果に終わった時期もあった。彼女たちのことを理解できるようになってきたのは任期が残り少なくなってからであった。

しかし、運良く後任の隊員が見つかり、また彼が筆者より数段上のレベルのミツバチの知識があるので、何の不安もなく象牙海岸を去ることができた。

最後に、多大なご指導を賜った(株)下鳥養蜂園の下鳥大作社長、また養蜂のイロハを教えてくれた谷口金次郎氏、そして玉川大学の吉田忠晴助教授、活動を支えてくれた多くの方々に感謝の気持ちをお送りしたい。

(〒861-41 熊本市野田2-30-54)

MATSUOKA, MITSUO. Beekeeping development in Côte d'Ivoire. *Honeybee Science* (1996) 17(3): 135-138.

The author has worked to develop beekeeping in a rural area of Côte d'Ivoire as a member of Japan Overseas Cooperation Volunteers. This report describes his activities in the project and also the recent status of beekeeping in Côte d'Ivoire in West Africa.